ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

DIGITAL
2014

ARTA Project
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

CLICK TO PLAY

YouTube

ARTA DIGITAL CHANNEL

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
DIGITAL
2014

ついに輝きだした、大いなる

飛躍の序章。

ARTA 2014 RD.3 AUTOPOLIS
「ついに輝きだした、大いなる飛躍の序章。」

「一気にグリッドへ行くぞ、速くクルマを出せ！」

真夏のような暑さの中、決勝まであと僅かというオートポリスの興奮の高まりをよそに、

ARTAのガレージは人の動きが慌ただしくなっていた。

決勝に向けたウォームアップ走行を終えようというところで、55号車のCR-Z GTにまさかの

トラブルが発生し、燃料タンクのバルブからガソリンがオーバーフローしていたのだ。

「一瀬、給油する時間がないかもしれないから、その時のことも考えておいて！」

メカニックからエンジニアの一瀬俊浩へと連絡が入る。

「あとさ、クールスーツが壊れたよ。完全に効いてない、クールスーツが！」

スタートドライバーとしてコクピットに座る高木真一から、さらに困惑の無線が届く。

トラブルの余波を受けたのか、前日に修理したはずのクールスーツがまたしても機能を失った。

燃料タンクの問題は解決できたが、30度を超すこの暑さにもかかわらずクールスーツは

壊れたままで高木をフォーメーションラップへと送り出さなければならなかった。

最後のアタックをブロックされながらも2番グリッドを獲得した速さとは裏腹に、

55号車のレースはバタバタの中でどうにかスタートに漕ぎ着けたのだった。

それでも高木は「頑張るよ〜」と無線で伝えながらスロットルペダルを踏み込んでいく。

2番手をキープしたまま、首位の61号車スバルBRZのテールにしっかりと食らいついていく。

3位以下は徐々に大きく遅れだし、優勝争いはこの2台だけに絞られたようだった。

「いいぞ、良いペースだよ、真一！」

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市が、高木を勇気づけるように声をかける。

この暑さの中、クールスーツなしでクローズドボディのGTマシンをドライブする苦しさは
よく分かっている。ましてや、CR-Z GTにはハイブリッドのバッテリーが搭載されているのだから
確実に暑さは増している。
そしてその一方でGT500クラスを戦う8号車ARTA NSX CONCEPT-GTも、見違えるほどに
好調なパフォーマンスを見せている。9番グリッドからスタートした松浦孝亮は、\
上位勢から置いて行かれることなく1台ずつオーバーテイクを重ね、6番手まで浮上してきた。
今シーズンは苦戦を強いられてきたNSX CONCEPT-GTだが、このオートポリスでは間違いなく
前進を果たしていた。
松浦は初日から感じていたその手応えを、決勝前のウォームアップ走行でさらに強くしていた。
「今日は今週末の中でも一番クルマが良く曲がってるよ」
ただ、GTマシンに不慣れなビタントニオ・リウッツィにとってはそれが障壁になる可能性も
あった。
松浦はチームを牽引する立場として、そこまで考えてセットアップを仕上げなければならなかった。

AUTOBACS
55
Super AUTOBACS
こうみえて元気!!
S.Takegi
T.Kobayashi
POTENZA
Samantha Thavasa
10
HONDA
OFFICIAL
AUTOBACS
8
POTENZA
ARTA DIGITAL 2014 RD.03

「僕だけだったらこのまま行っても良いけど、トニオはオーバーステアだって言ってペースが上げらないかもしれない。ただ、今年のクルマはレース途中からフロントがきつくなってアンダーになってくるんだよ、絶対に。

だからちょっとオーバー寄りでスタートした方がバランスが取れてくる気がするんだけど……」

決勝までに残された40分間でエンジニアの佐藤真治やリウッツィたちと相談し悩んだうえで施したセットアップの変更は、当たっていたようだ。

「前に見える4台が3位争いね！ この集団に追い付こう！」

ポジションを伝える佐藤の声も弾む。そのくらい、上位集団が見える位置で戦うという状況を待ち望んできたのだ。

前を行くライバルたちがタイヤの摩耗とグリップ低下に苦しむ中で、生き生きと追いかける松浦の声からは久々とも言える本格的なバトルを楽しんでいるようにも感じられた。

「ちょっとアンダーになってきたかもしれない。今日はタイヤがキツいわ〜！」

レース距離の3分の1を超えたところで、タイヤのグリップダウンに苦しむあまり早めの
ピットインを強いられるマシンが続々と出て来た。表面のゴムが完全に摩耗しきってしまった
マシンもあったほどだった。それでも松浦にはまだ余裕があった。
ライバルたちの動向を窺い、クリアラップでプッシュしてタイムを稼ぐ
「みんながどのタイヤを履いたか見てから入ろうよ。もう1周行くよ、前がクリアだから！」
29周目にピットインした8号車には、リウッツィが乗り込んでコースへと戻っていく。
開幕2戦ではまだ上手くペースが上げられないでいたリウッツィだったが、彼もまたここにきて
大きく前進していた。
サインボードに掲げられる前後のマシンとのタイム差は、ほとんど変わることなく推移している。
つまりライバルたちと同等の速さで走行できているということだ。

しかし39周目、突然リウッツィからの無線が響いた。
「ブレーキペダルが壊れた！ ウォールに突っ込んだ！」

程なくしてテレビモニターにもターン1外側のタイヤバリアに突き刺さっている8号車の映像が映し出され、今回こそは大量得点をと期待しながらピットガレージでレースを見守っていた鈴木亜久里監督と松浦の表情もこわばる。

「ノーブレーキだ、ブレーキペダルが奥までいったんだ！ とにかくなんとかピットに戻るよ。フロントしか効いていないみたいだ」

リウッツィは自力でマシンを脱出させてガレージに戻ってきたが、タイヤを取り外すと右リアのブレーキ周りが濡れていた。ブレーキオイルが漏れ出していたのだ。

悔しい思いを抱えながらも、ここでリタイアを選択せざるを得なかった。

「トラブルは非常に残念だね。でも、ようやくこの不調から脱出できそうな感触を得られたから、次のレースでは期待が持てるね」亜久里監督はそう前向きに言った。

そして、55号車の方はまだ優勝争いをしている。

「真一のペースがかなり良いんだよ。単独で走れてるから、ここでピットインしてしまうのはもったいないんだよ。真一、頑張れるか!?」

土屋の呼びかけに、高木は「はい、頑張ります！」と答える。

首位を走るBRZが29周目にピットに飛び込んだが、高木はまだ好ペースを保って走り続けている。

クールスーツがなくてコクピットの中は厳しい環境のはずなのに、高木は弱音を吐かない。

「真一、ペースを上げよう。タイヤ使い切って良いよ！」

「OK、プッシュするよ！ まだ体力もあるからね！」

そして33周目にピットに飛び込んだ高木のマシンに小林崇志が乗り込み、ピットクルーが

素早い作業で送り出す。

「行くよ！」小林の気合いのこもった声とともに加速して行ったCR-Z GTは、

さっきまで前にいたはずのBRZよりも前でコースに戻り、追い付かれる前にタイヤに熱を入れて

本来のペースで走り始めた。

高木のプッシュと小林のウォームアップ、そしてクルーの素早い作業。そのピットストップで

首位のポジションを奪い取ったのだ。

「小林、いいぞ！ 逆転したぞ！」小林のペースはBRZよりも安定して速い。

2台の差はたちまち8秒にまで開いた。

「高木さん、Tはどことどこで使ってました？ 教えてください」

走行を終えてガレージで戦況を見守る高木に、小林が無線で聞く。

実は高木は自身の走行中も、小林へのアドバイスになるようなレポートを無線で伝え続けていた。

「このコーナーでは4速を使った方が良い」

「回生を効かせた時のブレーキングは気をつけた方が良い」、等々。

ガレージで準備をしている小林は、その無線を聞いてドライビングのイマジネーションを

さらに磨いているのだ。

それだけではなく、走行セッションが終わるごとに高木は車載映像を見ながら小林に

ドライビングのアドバイスを授けていた。

土曜の夜もホテルの部屋では遅くまで2人の“作戦会議”は続いているのだ。

小林をさらに成長させてやりたいというチームの思いと、もっと成長したいという小林自身の思い。

その2つが重なり合って、彼らはさらに大きな飛躍を遂げようとしている。

ARTA DIGITAL 2014 RD.03

ストレートエンドでブレーキトラブルに見舞われたGT300の車両がコースを飛び出し、
タイヤバリアとガードレールを飛び越える大事故を起こしてしまったのだ。
「小林さん、SC入るかも！」一瀬が心配そうに伝える。
その1コーナーの手前で止まって火が出たGT500の車両もあり、ARTAの危惧通りにセーフティカーが
導入されてしまった。
「これでスバルがケツに張り付いたからね」
土屋が2位BRZとの9秒の“貯金”がなくなったことを伝える。
しかしそれよりも心配なのは、タイヤの温度低下とそれによる路面のタイヤカスの付着だ。
「これでタイヤカスを着けちゃったらキビしくなるね…もう着いてるよ」小林が報告する。
タイヤを温めるためにマシンを左右に振れば、レーシングラインを外れてタイヤカスを拾うことに
なる。だからウィービングと呼ばれるこのアクションをとることもできない。
ポジション整理のために、後ろから来るGT500の車両を何台も先行させなければならないが、
ラインを外して道を譲ればタイヤカスを拾うことになる。

「47秒フラット、ちょっと速いな！」土屋が指摘する。

速いペースで走ることはできても、タイヤがダメになってしまったのでは意味がない。

タイヤをいたわりながら、最後まで走りきることのできるペースに抑えて走らなければ

ならないのだ。そのためにも、このBRZとのギャップには大きな意味があるのだ。

「右コーナーでちょっとアンダーが出て来たんで、ちょっと抑えて左フロントをいたわります」

「頼むぞ、小林！ スバルが来るまで左フロントは使うな」

「今くらいのペースで行って、ペースが落ち始めてきたらプッシュしていきます」

「そのペースで行け、集中して行けよ！」

そう檄を飛ばす土屋を始め、8号車が戦列を去って55号車に全精力を集中させているARTAの

面々の脳裏には、すでに優勝の二文字がちらつき始めている。

小林は安定してBRZよりも速いペースで走り、ギャップはじわじわと広がっていっている。

そんな矢先、まさかの事態が起きてしまった。

それを心配して亜久里監督がたまらず小林に無線で伝える。

「小林、自分の綺麗なラインだけ走ってれば良いからな。心配しなくても、（BRZの履く）ミシュランだってピックアップしてるんだから！」

亜久里がエンジニアではなくドライバーに直接無線で語りかけるのは滅多にないことだ。

それだけ優勝を目前にしてこの状況は切羽詰まっている。

「タイヤカスが着いちゃったんでもしかしたら抜かれるかもしれないけど、絶対に抜き返すんで！」

小林も期待に応えるように力強い言葉で返す。

その背景には、チームみんなの力で自分が成長を遂げているのだという思いがあるのかもしれない。

スロー走行になってコクピットには走行風が入らず、室内の温度は急に上昇していく。

クールスーツのない小林にとってはかなり厳しいコンディションになり、熱中症で意識を失ってもおかしくないくらいの状況だ。それでも小林はしっかりとステアリングを握る拳に力を入れた。

「小林、クルマ自体は絶対速いし、後ろのスバルはストレートが遅いから、絶対抜かれないよ。レース再開の時はもうセクター3から全開で行かなきゃダメだよ！」

高木も無線に加わって小林を叱咤する。「小林、SCが入る周になったら言うからさ、
（前にいる）500の集団にどんどんついていっちゃえば良いよ。」
亜久里監督も珍しく積極的にアドバイスをする。
そして、セーフティカーのライトが消え、レース再開に向けて各車のエキゾーストノートが
高まっていく。「小林、500が全開になったよ、500についていけ！」
亜久里だけでなく、高木も拳を握る力がいっそう強くなる。
「残り数周のスプリントレースだから、予選モードで行こう、予選で！
ハイブリッドの使い方だけ間違えるなよ、最初にぱんっと使って引き離したら、
あとはバッテリーの温度を見ながら上手く使って行け！」
小林はリスタートからの好加速で1コーナーでは上手くポジションを守り、そこからまた少しずつ
BRZとのギャップを引き離していく。「いいぞ、いいぞ！ それで良いぞ！ 集中していけ、
残り8周！」土屋も冷静でいようと努めてはいるが、興奮は抑えきれない。
後方からはまた少しずつBRZが差を縮めてきた。2台の差はまたじわじわと接近していく。

「スバルも速いペースで追い上げてきてるからね、頑張れよ！」

残り3周、2周、息を飲むようなカウントダウンは進み、そしてラストラップ！

小林は一切の付け入る隙を与えることなく、トップでチェッカーを受けてみせた。

「やった〜！」大声で叫びながら、小林はピットガレージ前を通り過ぎていく。

「いや〜、これでやっとプロになれますね！」

こんなんじゃまだお前はプロとは言えない、そんな声に対して小林が結果で自身の力を

証明してみせた。

「よし小林、プロだ！ 良い仕事したな、カッコ良かったぞ！」

土屋が手放しで褒め称える。

「ちょっと水と氷をいっぱい持ってきて欲しい……」

荒い息づかいとともに、無線でチームスタッフに身体を冷やすための氷を頼んだ小林の体力は、

もう限界に近かった。ウイニングランを終えて「1」が描かれたボードの前にマシンを停めると、

コクピットから降りると真っ赤に上気させた顔でふらついた足取りをなんとか地面に落ち着かせた。

CLICK TO PLAY

YouTube

ARTA DIGITAL CHANNEL

ARTA DIGITAL 2014 RD.03

「ありがとうございます。本当にクルマが良かった。ありがとうございます。

本当に皆さんのおかげです。本当に嬉しい！」しみじみと語る小林に、土屋が言い返す。

「みなさんのおかげじゃないんだよ、走ったのはお前。お前が勝ったの！」

そう言ってチームのみんなで抱き合って喜ぶ。

最高のピットストップ逆転劇に、55号車のクルーには主催者からベストメカニック賞も贈呈された。

そしてリタイアに終わったとはいえ、8号車にもポジティブな要素はいくつもあった。

成長を遂げているのは若い小林だけでなく、このチームの全てが着実に前へと進んでいるのだ。

そう思うと、ピットウォールとグランドスタンドにたなびくオレンジ色のフラッグが、

今日はいつもにも増して誇らしく見えた。

シーズン3戦目にして、ARTAを照らす光明ははっきりと見えた。

そして、その光が指し示す彼らの目的地はもっともっと高い場所にある。

これはまだ大いなる飛躍の序章にしか過ぎないのだ。

RESULT

GT500

ARTA NSX CONCEPT-GT NO.8 ヴィタントニオ・リウッツィ / 松浦 孝亮

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
9位	リタイア	27Laps	1'38.548	15位

GT300

ARTA CR-Z GT NO.55 高木 真一 / 小林 崇志

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
2位	1位	-	1'46.497	3位

amsc

AUTOBACS Motorsports Conference

オートバックス モータースポーツ連絡協議会

【amsc参加企業】

AUTOBACS
BRIDGESTONE
Panasonic
Holts
Mobil 1
Coca-Cola
BP vervis
Pioneer
BOSCH
caseplay
PIT-PRO
PROSTAFF
CARMATE
T-POINT
日東工業株式会社
PIAA
岡山国際サーキット
SUZUKA CIRCUIT
TWIN RING MOTEGI
IPF
AUG アウグ株式会社
ALPINE
UNICON
WILLSON
エーモン
エステーオート
FEDERAL
m's
ELECOM Logitec
エンパイヤ自動車株式会社
BAL OHASHI
CARALL
オカモト産業株式会社
EVOHO
KUMHO TIRES
clarion
Cretom
COMTEC
JVC KENWOOD
RAYBRIG
DUNLOP
星光産業株式会社
SEIWA
CellSTAR
SOFT99
グリンビュー
ダイヤックス DIA CHEMICAL CO.,LTD.
VAC
DENSO
TOYO TIRES
TB UNIFASHION
Trywin
NAPOLEX
KNOWLEDGE HOUSE CO.,LTD.
Tomboy
RADICAL CARBON HASEPRO
PAL STAR
Hitachi Chemical
ECLIPSE
FUJITSUBO
BroadLeaf
BELLOF
BONFORM
MITSUBA
MITSUBISHI
MIRAREED
UTAN ENTERPRISE
YOKOHAMA
リンレイ

株式会社アネブル　安全自動車株式会社　株式会社イヤサカ　株式会社ウェッズ　Fデザインオフィス　興工業株式会社　コアーズインターナショナル株式会社
株式会社サンコー　株式会社サンテック　株式会社ジーエス・ユアサバッテリー　株式会社湘南レオテック　株式会社錦織　日星工業株式会社　株式会社バンダイ
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン　ブリッド株式会社　株式会社ホットスタッフコーポレーション　三菱重工業株式会社　株式会社ユピテル　株式会社ワッツ

2014年2月28日現在会員企業

amsc（AUTOBACS Motorsports Conference）とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたいと考えております。

Thank You for Supporting

Samantha Thavasa Japan Limited

Calm Flower

case play

ARTA GALS

株式会社オートバックスセブン

ARTA Project

ARTA DIGITAL
Youtubeチャンネル

To be continued next race.....

Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA
Text : Mineoki YONEYA
Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD